

Title	青年時代の鈴木文治：本間俊平とのかかわりを中心として
Sub Title	Bunji Suzuki as a youth : about the relationship between Suzuki and Shunpei Honma
Author	吉田, 千代
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1977
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.70, No.6 (1977. 12) ,p.674(94)- 685(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19771201-0094
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19771201-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青年時代の鈴木文治

——本間俊平とのかかわりを中心として——

吉田 千代

- 1 はしがき
- 2 山口高等学校時代
- 3 本間俊平とのかかわり
- 4 学窓から実践活動へ

1 はしがき

1912(大正元)年8月1日、東京帝国大学出身の若き法学士鈴木文治は、東京・芝の統一基督教弘道会の一室において、雑多な労働者を中心とする僅か15名の会員を以て友愛会を創立した。それは大逆事件直後の弾圧下、社会運動にとっては、きびしい「冬の時代」といわれるなかからの発足であった。だが、周知のようにこの友愛会は、ほどなくぼつ発した第1次世界大戦を契機とする日本資本主義未曾有の好況期に、折から高揚した労働者階級の自覚の上に大きく支えられて急速に組織を発展させ、1919(大正8)年には、大日本労働総同盟友愛会と改称され、日本労働組合運動の中核となった。およそ社会運動の中核が労働組合運動であるとするれば、鈴木文治こそは我が国におけるその建設者であると言えよう。鈴木文治に対する評価は、これまで種々な形でなされているが、「片山潜は彼によって始めてその志を実現しえたし、界や幸徳は、彼の業績を媒介として、その思想を労働者大衆にひろめることができた。そして賀川や渡辺にいたっては、彼によって活躍の舞台を与えられたのである。」⁽¹⁾とは、松尾尊兌教授の鈴木に対する実績評価である。若き日の鈴木文治については、同教授により既に克明な研究がなされている。⁽²⁾本稿は、これらの成果をも参照させていただきながら、鈴木文治の生涯を綴る伝記的研究の一端として、青年時代、とりわけ、こ

れまでほとんど着手されていない高等学校時代における本間俊平とのかかわりを中心として、その思想的形成をたどってみるものである。

2 山口高等学校時代

明治35年3月、宮城県立古川中学校の第一回生として卒業した鈴木文治は、同年9月初め、山口県の高等学校に入学するため、生れてはじめて郷里の都仙台をあとにし、あらたな生活に向ってスタートした。

旧山口高等学校(現山口大学)は、明治27年公布された高等学校令により、それまでの山口高等中学校を改め、山口高等学校として発足したものである。その源は、文化12年、藩士上田鳳陽が開設した私塾「山口講座」に始り、山口藩主毛利氏が萩より移した明倫館がその後をうけ、明治4年、山口中学と改められて、17年には高等科が併置されていたものである。後のマルクス経済学者河上肇も明治28年9月には、この高等学校文科に入学しており、同校からは明治・大正・昭和の3代にかけて活躍した著名な学者、実業家等を多く輩出している。

鈴木文治が入学した当時の高等学校は、全国一律に行われる共通選抜試験制度により、受験者は、試験の成績と志望の順位とによって学校の所属がきめられることになっていた。本来なら、郷里宮城県仙台の第二高等学校に入学したかったはずの鈴木も、こういうわけで遠く離れた西国山口の地で高等学校の3年間を過ごすことになったのである。だが、この若き日に山口で過した体験こそは、鈴木に生涯に決定的な影響をもたらすものがあつた。

鈴木は、両親が苦しい生活の中から、家財道具を売

注(1) 「近代日本の巨人100人」文芸春秋、(昭和39年8月号、所収)。

(2) 松尾尊兌「若き日の鈴木文治とその周辺」(大正デモクラシーの研究、青木書店、1866年、所収)。

りはらって準備してくれた僅かの旅費を懐にして山口へ向った。途中、東京で同郷の先輩吉野作造、内ヶ崎作三郎に会い、山口での学生生活についての助言をうけ、内ヶ崎氏の知己、戸沢正保教授への紹介状をたずさえて山口高等学校に着いた。茨城士族出身の戸沢教授は、当時同校で英語を教えていた。彼はすぐ鈴木を保証人となって寄宿舎入りを世話してくれた。この頃の校長は、福井県士族出身の松本源太郎、教頭は石川県士族出身の理学士横地石太郎、鈴木のカラス監督は、同じく石川県士族出身の松本良郎というように教授陣は、ほとんど全国から集った士族出身者で占められていた。これに対し学生の大半は、いうまでもなく平民で、大部分は関西方面の者が多かった。鈴木のカラス第1部甲英法政文科では、46人中、東北出身は鈴木他に岩手から1人あったのみであった。こうした集りの中で、東北なまりの鈴木言葉は、いかにも重く感じられたことであろう。しかし持ち前の明るい性格と少年時代より養われてきた雄弁は、ほどなく学友間の注目するところとなった。

山口高校には、明治31年1月より学友会が組織されており、職員・生徒は、学芸部・運動部・会報部にそれぞれ属して活動しながら「互与ニ親睦ヲ厚ウシ美風ヲ養ヒ学校教育ノ完成ニ協力」⁽³⁾していた。鈴木が入学した当時には、この学友会の活動も漸く定型化すると共に、一部にはこれを破って新機運を開かんとする動きもみられた。特に入学試験制度の改革に伴う生徒の全国的集合は、しだいに県人会の如き小団体を簇出せしめ、これが校風問題に関連して、校歌制定の要望を生むに至っていた。他方、宗教的傾向の台頭も著しく、仏教青年会、羊牢会等を成立していたが、反面、無宗教を談じ、転じて政治に移り国家を論ずるの傾向もまた強くなった。特に東亜の風雲急を告ぐるに及び、時局に関心を注ぎ、政治外交を論ずる声高く、山都論壇多彩を呈していた。⁽⁴⁾こうした雰囲気の中で、鈴木は学芸部に属して活躍しはじめたが、明治36年の初めに学友会が行った校歌の懸賞募集には、逸早く応募した。この第1次募集には6人、第2次募集には16人の応募作品があり、7人の教授によって審査の結果は、第2次応募者片山久吉の「花の都」が校歌として選ばれ、

鈴木作詩「学びの海」は、おしくも佳作にとどまらなかった。翌37年11月19日、学芸部の邦語講談会が開かれた折には、教授1人、生徒5人が選出されて、それぞれ演説や講話が行われたが、この日鈴木は「国運の前途」と題して熱弁をふるった。彼は、また学友会報の論説・雑録にもしばしば投稿したり、万朝報の懸賞短篇小説に応募したりもして、大いにその文才を発揮した。残念ながら、これらの応募作品の内容については資料的に接することができないのであるが、当時の教頭、横地石太郎教授は後年その頃を回想して、学芸大会の演説に出場した選手の中で「鈴木文治君の演説が最も出色の出来栄であった」⁽⁵⁾と述べているところからも、高等学校時代の彼の活躍ぶりが偲ばれる。

しかしながら、こうした日々の中でも、鈴木は苦学生として物質的窮乏のゆえに煩悶していた。ようやく高等学校に入学はしたものの、校則によって定められた制服——小倉織又はヘルの背広——を作ることができず、私服で登校していた頃、度々教頭の横地先生から呼び出されて注意をうけた。たまりかねた鈴木は「学校は人材の教育が主か洋服調製が主か先生に喰ってかかり、眼玉の飛び出る程叱りつけられた」⁽⁶⁾こともあった。卒業していく先輩から古外套をゆずりうけ、古靴屋で兵隊の古靴を買ってはき、高校在学の3年間着つづけた和服は、見るもあわれな有様となり、ポロポロに破れた袴は、かんぜよりでつないではき通した。大勢の子供を抱えて生活に窮する両親からは、学資の送金が途絶えてしまった。はじめて孤独の境地に立った多情多感な青年鈴木は、「身は天涯の異域にありて囊中無一文、月謝の催促、舎費の督促にどうとも思案にあまり煩悶懊悩の目を送り」ある時は北米行きを決心し、又ある時は「死を思うて決せず半夜瀉城龜山のほとりを彷徨したことも幾度か」⁽⁸⁾あった。こうした高校時代の苦学生鈴木文治の様子を、彼が2年生の時に書いた作文「夏期休業の記」によって、さらに偲んでみよう。

「夏は逝けり。萩のうら葉に戦ぐ金風は初秋の軍使として来れり。……余輩此の蕭殺冷静の天地に於て転だ感慨に堪えざるものあり。少しく過ぎし夏期休業の記を試みんと欲す。徳富蘇峰氏かつて

注(3) 山口高等学校学友会々則第1条。

(4) 『山口高等商業学校沿革史』(昭和15年)参照。

(5) 学士会月報・昭和5年11月。

(6) 鈴木文治『労働運動20年』(一元社、昭和6年)、13頁、以下自伝と略す。

(7) (8) 自伝15頁。

曰く、暑中の快樂は旅行にありと、又曰く読書にありと。然り苦熱の裡を去りて一笠一杖の行脚を企て、或は小径幽かにして青苔滑らかなる処、自然の美と冥合して其恩に浴し、又緑蔭風涼しき処、愛書諷誦して夏ながら積雪の中に清臥したるが如き思ひをなすなど、誠に夏は一面に於て吾人に与る所多しと云はざるべからず。

……学生の如き研讀に寧日なき者の此の季間に於ける夏期休業を望む事、大早の雲霓に於けるが如く、この期に於いて或は故園に、或は山間に、或は海辺に各々其の欲する処に趣きて自由なる生活を楽まんと欲するも亦宜なる哉。然り而して此の喜悅と安慰とを求むべき悠遊静養すべき此の休業中徒らに索漠なる暗黒中に彷徨して烈日の下に煩悶と懊惱とに経過したるものありとせば、運命の魔手の如何に峻酷なるを見て転だ憐憫に堪えざるものあるべき也。嗚呼余輩の如き其の一人也。余は此八旬の長日子中寸歩も山口を出でざれば殆んど自ら語るべき事なく、自らの日記を飾るべき一事だにあらざる也。人は大空に囀づる雲鳥の如く、野に鳴く牛の如く、悠遊静養の裡に喜ばしく嬉しくてその休業を楽めるに我は独り、鴻城の熱天地に徒らに煩悶苦悶の歴史を反復したるのみ。我が暑中休暇はかくして初まりかくして終りき。我が暑中休暇は則ち我が追懐録、回顧録、感慨録となり了せる也。

我故郷は東奥の大平原也。家は富めりと云ふべからざりしも数代の蓄を積みてよろづに事欠るを知らざりき。されど残酷なる時世の魔風は平和なる家庭を襲いて……唯だ我れは襲い来る山の如き乱涛の間に翻弄せられて夢の如く此の一年を送りたるなりき。しかも運命の茨の手は少しも緩まず、去年また地方に凶耕の災あり。家政は月に窮を告ぐるのみにして我れまた旧臘、月淡く霜白き夕よりはじめて食客こふものの生活を終りき。

斯くして迎えたるは今年の暑中休暇也。定めれる学資だにあらぬ身には旅行悠遊は思ひに浮べしとなれど同窓の此所彼処、観光の地を選定するに余念なきを見ては転だ懐旧の情堪えずして云い知れぬ万斛の悲波は脉々として念頭に浮び来りて惘然として長太息を禁ずる能はざるなりき。七月の事なり、心ある友の周旋によりて、さる会に出席

して初学者に英語を教へ、一方某教授の原稿の浄写をなし、傍ら定まりたる学資を得んとて力を尽したれど放ちし矢は空しくして、叩きたる門遂に開かれず、与えられたるは満身の創受と冷えたる石なりき。我れは、只この憂慮と煩心との間に単調なる生活を反復して酷暑を送り復た冷静の秋を迎へたるのみ。

淡窓の詩には『休言他郷多苦辛、同胞有友自相親、柴扉曉出霜如雪、君汲前流我拾薪』とあれど故園を離るる数百里にして山河隔絶し、知己なく朋友なく親戚のあらねば孑然として無言の地に対して孤心の満足、アム何処に求むべきぞ。

然りといへども更らに冥想一番すれば自己の運命に泣いて徒らに過去に恋々たるは婦女子の事のみ。男子由来豪爽を尊ぶ。彼の厭世主義の如きは戦敗者、失望者の悲観唱道する所、苟しくも廿世紀の男子は彼のロングフェロー詩中の青年たる覚悟なかるべからざる也。よし、世は轉變極まりなくして人生の益は苦きものなりと吾人は吾人の才力に応じて何等かの事功を残し、幾分、世運の開達進歩に貢献せざるべからず。死生は天命也。吾人は只邁往すべきのみ。亭々たる松柏は風霜に遇いて益々其縁を發揮す。古来偉人多くは逆境にありて其品性を陶冶志たり。所謂幾度歴辛酸志始堅なるもの吾人の本懐となすべきにあらずや。人は如何なる逆境にありとも常に逆境以上にあるの心事なかるべからず。……

吾人何ぞ戦を恐れむや。困難を恐れむや。逆境を咀はむや。『憂きことのなほこの上に積れかし。限りある身の力試めさん』……夕陽紅き時は晴天を卜し、西空黒雲に蔽はる時は雨の来るを予知すべし、志かも余輩の境遇は誠に今日を以て明日を卜すべからず……意志のある所必らず道あり、余輩は只毅然たる意志を以て遺憾なく余輩の力を尽し得ば、則ち足れり。豈に他を望まんや。

ユーゴー其の孫の誕生を祝して曰く、職分に生れ、自由に成長し、進歩に生活し、光明に死せよ。と。吾人願はくは此の箴言を服膺し、真理の正道を歩まん。……

今や秋は来りぬ。余輩は先づ空想を離れて活動を取り、悠遠の神を念ひて清高の心を養ひ、靈性⁽⁹⁾の煥発を求めん哉。

注(9) 鈴木文治「夏期休業の記」、明治37年9月に書かれたこの作文には、甲上と朱書の評価が付されている。

青年時代の鈴木文治

かつて両親の下で富裕な少年時代をはぐくまれた鈴木にとって、この山口高等学校時代の苦しい体験こそは、やがて彼の歩むべき道を決する一転機ともなったのである。だが、そこには若き日に苦悩する鈴木を力強く導いていた人物があったのである。

3 本間俊平とのかかわり

山口市内随一といわれる景勝の地、後河原を静かに流れる一ノ坂川、亀山橋のほとりに小さい赤い塔の建つ教会がある。ここは、かつて苦学生鈴木文治が日曜学校々舎の留守番をしながら、高等学校時代を過した場所である。彼は山口高等学校に入学当初、寄宿舎に入ったものの、前述の如く学費舎費の支払いもできず、物質的窮乏から一時は神経衰弱に陥った。みかねた保証人の戸沢教授は、彼を自分の家に引きとり、食客書生として世話してくれた。鈴木は、家族同様の親切をうけながら通学し、学資のためには近くに住む戸川秋骨教授の出版物の筆耕などをした。こうして一年余を過した後、当時東京帝国大学法学部の助教授をしていた吉野作造のはからにより、郷里仙台の養賢義会より毎月8円の奨学金が受けられることになったのを機に、戸沢家を出て、学校に程近い後河原の美以教会に間代無料で、日曜学校留守番として住みこんだ。彼は同教会の正会員になったわけではないが、所属信徒と同様の待遇をうけ、教会の手伝いなどをしながら卒業までの日をここで過した。⁽¹⁰⁾既に10歳の時に金成正教会でキリスト教徒として洗礼を受けていた鈴木は、山口高等学校に入学すると同時に、学内の羊牢会というキリスト教青年会に入り、後河原の美以教会にも出入していた。

山口高校の羊牢会は、会長と教名の顧問はいずれも同校のクリスチャン教授で組織されていたが、当時の学生の1人は、羊牢会の思い出を次のように語っている。

「……私は高商第一回生として入学したが、⁽¹¹⁾当時まだ高等学校二学年及び三学年生として残って居て、その中の羊牢会員から少からず励まされ指導を受けた。……鈴木文治兄も高等学校時代から

羊牢会員として熱心に活動して居られ、大学に進んで後も時々角帽を着けて学校に見へて奨励してくれたことを覚えて居る。……羊牢会の集りは実に懐しいものであった。佐々木先生のお宅でよく会合を開いたが、極めて素朴な集会で先生も生徒も隔てなく全く兄弟としての親しみを持ち『電落し』などの余興をやって、落ちたものは先生、生徒の区別なく隣席に居た者が思い切って擲ったものである。先生はよく藪から棒的に『決心出来たか出来たら洗礼を受け給へ』と詰めよられた。先生の熱心には動かされたものが多かった。秋吉から本間俊平先生が時々青年会に出かけて来られて痛棒を喰はされたものだ。当時のことで今一番深い思い出となって居るものは、春日山で相当永く続けて毎日祈禱会をやったことである。皆の者が赤心を吐露して懺悔し、祈り、語り、大いなる力を受けた。其れから信徒が其の家庭を開放して会員を迎えてくれた。又『家庭開拓』と称して押しかけて御馳走をねだったりなどしたものだ。ずいぶん家庭の方にも迷惑をかけたことと思うが学生らしい所も⁽¹²⁾あった。今でも大いに感謝している。……」

後河原美以教会には、この頃柳原直人牧師、続いて田中義弘師が赴任し、青年の指導に力を入れて山口高校の学生間に伝導をしていたから、聖書の講義や神学哲学の講演をききに教会に入入りする学生も多く、鈴木自身も羊牢会のグループの1人として、牧師や信徒らとも親交を深め、やがて間代無料で日曜学校々舎の留守番として移り住むことができたのである。

ところで、この学友の思い出話しに出てくる本間俊平先生については、鈴木自身も後年、「信仰は熱烈火のやうな実践的宗教であった本間氏は、よく時折七里の山路を踏破しては、我々青年の仲間に来り投じ或は手を握って祈り、或は臂をとって談じた。此頃同氏の感化を受けたものは少くない。……私などもその1人⁽¹³⁾である」と述べている。

本間俊平は、文豪・森鷗外を感動させ、その小説「鈍一下」のうちにH君として登場している人物であるが、彼は当時、山口県秋吉村で長門大理石採掘所を

注(10) この教会は現在の山口信愛教会であるが、同教会の信徒名簿中に鈴木文治の名はみられない。このことは、彼が既にキリスト正教会(ギリシヤ・カトリック)のキリスト教徒として受洗していたためである。

(11) 山口高等学校は、鈴木が在学中の明治38年に山口高等商業学校と改称された。

(12) 矢野貫城「高商初期の羊牢会の思い出」(『羊の檻』第2号、昭和9年7月15日、所収)。

(13) 自伝、20頁。

経営し、大理石の採掘と加工のほか青少年の教育、とくに⁽¹⁴⁾出獄者、非行青少年40人程を⁽¹⁵⁾あずかり、採掘にあたりながら、これの補導と教育に献身していた。明治35年から昭和6年まで、彼が秋吉在住の30余年間に山口県下において、教育開拓に果たした役割はきわめて大きかった。本間は明治6年、新潟県西蒲原郡の漁村に生れ、極貧のために小学校を中退して12歳で出稼大工の徒弟となつて、福島、仙台、さらに北海道を経て上京し、大倉土木組へ入社した。同社の横浜出張所に勤務中、奥江清之助によってキリスト教に導かれ受洗した。その後、仙台、弘前、茨城での生活を終えて29歳の夏、秋吉村に移っていた。本間俊平については、既に伝記⁽¹⁴⁾もかかれ彼自身の講演集なども出されているが、秋吉の採掘所を訪れた者は、だれしも「石工に化けた英霊が大理石を採掘しつつ触れあう人の心のうちに神を喚び醒しつつある」(徳富蘆花)のを感じたという。

この秋吉台の聖者は、鈴木も述べているように、七里の山路をこえて山口高校や美以教会を訪れて青年達を指導していたばかりでなく、全国各地に講演旅行をなし、さらに新聞・雑誌にもしばしば投稿して、教育論・労働神聖論を吐露していた。

本間は、教会の牧師ではなかった。彼の信仰は哲学や神学のように書斎のなかから生みだされた抽象的な思索の結果ではない。それはまさに社会人事の一切に強いかわりあいをもちながら、父なる神との深い一致に生きる実践的信仰であった。本間の教育論に共鳴して秋吉の作業場を訪れ、その指導を求める中学や高等学校、師範学校の教師は多かった。また、かつて建築工事の現場監督として宮内庁や軍の仕事にも携わったことのある本間の交友関係は広く、時には陸軍や海軍の兵学校からも招かれて講演をした。彼は日本古来の武士道精神とキリスト教とは一致するものであると考へていた。これは後述する本郷教会の海老名弾正にも相通じるものがあつた。

秋吉台の本間の家は、彼の徳を慕って集う青年たちの心霊修養の道場ようになった。こうして山口高等学校の生徒たちのなかにも、日曜日には遠く秋吉台の本間の作業場まで朝の礼拝に出かけるものがあつた。まだほの暗いうちに提灯をぶらさげて三々五々、寄宿舎を出発し、いくつかの峠をこえて行く彼らの足どりは軽く、その心は信仰に燃えていた。秋吉行きは、

しだいに寮生たちの誇りとしてうけつがれ、雨の日も雪の日も休むことなく長くつづけられたという。

山口高等学校の生徒と本間俊平との関係については興味深いものがあるので、少し長くなるが本間俊平自身に語ってもらうことにしよう。

「久々にて本校を訪問し、諸君と共に語るの機を与えられたることを光栄とします。只今校長横地先生の申されました如く、私は20年前、本校が山口高等学校であり、松本先生が校長でありし当時より生徒の御方が私の処へ段々御出でになり、自然多くの方々の精神上御相談相手ともなる様になり教授の御方々とも親しく交はり、大勢の中には又悲惨の出来事あり、六ヶ敷事情も起り来てその始末其他の交際が段々と深くなり、あの玄関の一隅、寄宿舎の軒下、製図教場の入口、かつては重荷を負へる友を慰めし処である。自殺に迫りし若き兄弟と神に祈りを捧げし処である。校長さんも私も当惑閉口した記念の場所であると云ふわけで、過言かは存じませんが私は、本校の塵芥片付役・小使・評議員にでもなりし如き有様であつた。であるから本校を訪ふ事は、私に取っては兄か弟の家でも尋ねる心地がする。否親里へ帰りし心持が致します。随つて私の申上る事は、演説でも説教でもなく極めて無遠慮のおぢさん厄介な兄や弟の調子である。許して頂きたい。

今朝申上て見たい事は生きた甲斐ある生涯と云ふ事である。人生の真意義とも云ふべき事である。諸君もこの事に就て考へて居らるるに相違ない。イエスは私に教へて曰く『悲しむ者は幸福也、その人は安慰を得べければ也』と。即ち人生は苦勞人でなくては生きた甲斐がないと云ふ事である。……

先年本校の前身山口高等学校に一人の生徒が居た。この青年は一生懸命に勉強して常に優越なる成績をあげて居た計りでなくして、常に心を生徒一般の精神修養上に注ぎ、延いて諸先生方の家庭にまでも心を配り、あるときは夜中六里の道をかけ来て私を叩き起し、共に色々心配した事も少くなかつた。彼は実に書生の苦勞人であつた。彼の心配に由りて多くの同窓生が危険なる墮落の淵より脱出した者は、あげて数も難しと云う程であ

注(14) 三吉明『本間俊平の生涯』(昭和41年)、小原国芳『秋吉台の聖者本間俊平先生』(昭和5年)などがある。

(15) 前掲書参照。

った。彼は今高等官三・四等の壮年役人であるが今も尚苦勞人である。私は思う彼ほど仕合せ者はないと。何となれば此の如く苦しむ人の程度は又慰めらるる事の尺度であるからである。……校長先生からよい会社の役員に世話してもらい、できるだけ楽しんでボーナスを沢山もらいたい。持参金沢山の新しい女を嫁に欲しいなどと許り考えて居る者は、神の造りし人の子の特権を放棄し自ら地獄に墜する者である。キリスト曰く、悲しむものこそ人生の幸福児であると実に深い哉。キリストに由る者は事毎にこの人生の真義を学び、学校のために、社会のために、凡ての同胞のために奉仕の生活をなすに至り、到るところに慰みと楽を見出し、安逸を厭い、勞苦を好み神の大業に参加する事のできる生きた人となるのである。諸君この一事を大に考ふべきである。

かつて本校より放逐せられた気の毒な一青年があった。彼は何々省次官の子であった。私を頼って来られましたが私は何も呈する事は出来なかった。只キリストの大訓を以て彼を慰め導きました。彼は大なる過去の誤謬を発見すると共に、一変し苦勞人となった。遂に今日は本邦第一等の銀行の重き責任を負ふの身となった。又一青年あり、卒業間違いなしと極め込み、湯田で後進の同窓生を集めて送別の盛宴を張り、不用の机や時計をドンドン人に遣して大に気前を見せたはよかったが、お振舞の翌朝学校に到り見るや、こは実に意外なるかな。落第も落第、大落第なので短刀を抜き放し、先生を殺して自分も自殺せんなどと非常に困りしが、謝すべきかな。イエスに従って歩みを改め全く革新の道に上り、今や某会社の取締役、彼の書きし本は五十版百版、洛陽の紙価高しなど云って広告を今日見ました。又一青年はあの寄宿舎で自暴自棄者と化し実に気の毒とも浅ましいとも云ふ様なき危き谷に落ちて居った。私は何の幸ぞや、この不幸の兄弟と友たるの光榮を許されました。祝すべきかな彼は大学を卒り、今や日本の大都市の幹部の一人となり尽力するの身とはなれ

り。……諸君日新の学問を修むると共に進んでイエスにふれよ。彼に従え。諸君が起って世界の一人として全人類の幸福に関与するの光と力と仕合せは、そこより輝き来るのである⁽¹⁶⁾。(傍点引用者)

訛りの多い本間俊平のツーツー弁の話は生徒達にはわかりにくい。だが、不思議なことに本間先生の真心から溢れでる言葉には心を打たれ、すっかり感心してしまったのである。当時の一学生は「私をキリスト・イエスの僕として、その生涯を捧げしめる決心に導いて下さった最初の人、実にわからぬツーツー弁の身振り手振りの熱心な御証詞でありました」と述べしている。

しかしながら東北生れの鈴木にとっては、ツーツー弁は却って本間先生への親近感を増していたのである。鈴木が宮城県金成村で少年時代を過していた頃、本間俊平も仙台に大工として働いていた。その頃、血氣旺んな法被姿の本間俊平は、多くの輩下をひきつけてキリスト教演説会場となった松島座に乗り込み、演説の妨害をして、押川方義、植村正久らを見事に沈黙させたりしたことがあった。だが、それから間もなく本間は教会に出入りするようになり、やがて聖パウロの如き熱烈な使徒となったのである。そんな本間先生の思ひ出話をきくにつけ、郷里から遠くはなれた孤独な苦學生鈴木は、いつしか本間先生を父親のように感じはじめていた。本間もまた青年鈴木の純粹さに心うたれ、慈父のまなざしで導いていた。

我々は、高等学校時代の鈴木⁽¹⁸⁾の作文をみる時、青年鈴木⁽¹⁹⁾の思想形成の上に、本間俊平の影響がいかに濃厚であったかを知るのである。そればかりではない。「イエスの教へられた其の義を求めよとは、神の完き品格を日夜求めて進めとの事である。自己のためにも人のためにも社会のためにも之を目標として進まねばならぬ。我らは神の国を建設するために神より来たりし者である。……区々たる人を相手にこせつきに来たのではない。……神は思想ではない、冥想ではない、実行である。……」

本間の宗教、それは自ら大工として民衆のために立ち上った実践家たるキリストの姿にあやかることであ

注(16) 本間俊平「山口高等商業学校における講演要領」(「回顧」大正11年、所収)。

(17) 佐藤寅吉「本間先生の追憶」(「本間俊平選集」昭和34年、所収)。

(18) 高校時代の作文については本稿に引用した他に拙稿「鈴木文治の生涯」(日本労働協会雑誌215号)にも引用されているので参照されたい。なお、鈴木は、これらの作文を大切に保存していて、総同盟会長時代に己が下に書生として来た親戚の一青年を励ますために、これを与えている。

(19) 山口高等学校における講演「人生の目的」(前掲「回顧」所収)。

った。「労働は生命なり、神が人間に吹き込みたる神聖なる聖気は額に汗する者の心に宿る、労働せざる者が何が故に尊きか、醒めよ国民、砲烟弾雨の汚戦場裡に何ぞ安眠を貪るや。労働は神聖なり。人類至高の目的に達する手段なり……」⁽²⁰⁾と教えさす本間先生の一言一句は、青年鈴木⁽²¹⁾の心に深くきざみこまれていった。本間は、しばしば青年達に向って「バイオニアたれ！」と叫んだ、「日本の今日の最大要求は、実にバイオニアたるの青年の出でんことなり。その政治と外交とに論なく商工業と農業とを問わず、バイオニアの青年よ出でよと叫びつつあるなり、……青年よ夢より醒めよ、巻煙草をふかしつつ海国男児を気取るを止めよ、その学業浅く貯蓄して出でもせぬ社会の事を憂うるを止めよ、汝は今日を放擲して明日の事のみ配慮しつつあるなり、汝世に出でて資本家なきを憂うる勿れ。バイオニアたるこそ大資本主なれ。……青年よ、君活動に委する大々戦場は今正に展開せらるべし、……アア・バイオニアの青年よ出でよ……」⁽²¹⁾

大逆事件の直後、「社会運動の冬の時代」といわれる

中から友愛会を創立し、文字通り大正期労働運動のバイオニアとなった鈴木は、後年、当時のことを回想しながら「私はマルクスの説に部分的には共鳴するところ少からざるにも拘らず、尚純然たる唯物論者になり切れないのは、此の時代の影響が可なりあると思つている」⁽²²⁾と述べているように、高等学校時代における本間俊平との邂逅は、まさに彼の全生涯に影響を及ぼすものとなっていたのである。こうして高等学校の3年間、郷里の両親の下には一度も帰省できず、きびしい窮乏生活のうちに「我れ何のために生きるか、何のために学問するか、世間の幸運逆運の存在、貧富懸隔に依る差別待遇」⁽²³⁾というような問題について考えやんだ鈴木は、本間俊平というたくましい実践的宗教家とのめぐりあいの中で、若き日の苦悩から立ちあがった。

ところで我々は、高等学校時代の鈴木文治を語るにあたって、この偉大な指導者本間俊平先生と共に鈴木を援けたもう一人の人物、若くて美しいクリスチャン夫人⁽²⁴⁾がいたことを忘れてはならない。彼女は、ある時は母のように、またある時は姉のようにやさしく彼を

山口高等学校時代の成績表

学 年 月	学 課 目	国 語		漢 文		英 語		独 語		歴 史	体 操	論 理 心 理 学 教 学	法 学 通 論	倫 理	総 平 均	席 次
		講 読	作 文	文 文	訳 読	文 作	講 読	文 作								
明治36年7月	学期平均	75		72	79	83	76	73	75	80					76.6	16
	1学年試業	71		90	85	65	77	66	78							
明治37年7月	学期平均		73	85	87	77	59	75	83	82	77	85			76.4	8
	2学年試業		86		50	90	73	65	70	65		65				
明治38年7月	学期平均		82	83	74	84	69	77	68	80	76		82	88	77.5	2
	3学年試業		67		90	84	73	74	63	77		65	90			

本表は山口大学に残る山口高等学校英法政文科甲組の学籍簿によつて、筆者が作成させていただいたものである。

注(20) 防長新聞、明治36年1月1日。

(21) 「私の教育」明治37年8月。

(22) 自伝、20頁。

(23) 自伝、15頁。

(24) この夫人は井上右次氏の妻、井上幸子夫人である。山口美以教会の信徒名簿によれば、夫人は明治35年5月25日に同教会において、シ・エ・テーク牧師から洗礼をうけている。井上夫人は、羊羊会の青年たちのためにしばしば家庭を開放していた。鈴木より7歳年上の彼女は、明治39年1月、夫右次氏の病死により未亡人となったが、鈴木が友愛会を創立して数年後に彼と再婚した。

青年時代の鈴木文治

いたわり励ましつづけてくれた。この女性こそ、ほかならぬ後年鈴木と結ばれた幸子夫人その人であった。

山口、それは鈴木にとって苦しみのうちにも、まさに強く美しく花咲いた青春の地であったのである。

こうして信仰を同じくする人々のあたたかい愛情に援けられ、明治38年6月、彼は若き日の決意を「言志」⁽²⁵⁾に記して山口高等学校を卒業した。在学中の鈴木⁽²⁶⁾の学業成績も良く、それをみると逆境にもめげず、絶えず勉学しつづけた努力の跡がみられる。因みに山口大学経済学部⁽²⁶⁾に保存されている学籍簿から、彼の高等学校時代の成績を紹介しておこう。

4 学窓から実践活動へ

明治38年の夏、高等学校の卒業証書を手⁽²⁶⁾に、一たん両親の下に帰省した鈴木は、9月1日、あこがれの東京帝国大学に入学するため上京した。時あたかも日露戦争直後のポーツマス条約についての民衆の不満は爆発していた。着京後4日にして目撃した日比谷焼打事件の騒動は、田舎学生鈴木⁽²⁶⁾の心に深い印象を残した。周知のように、この事件を契機として日本帝国主義は、その内部にはらむ矛盾を露呈しはじめたのである。翌39年には、最初の合法無産政党として日本社会党が結成され、時代の気運はまさに大きく転換しつつあった。

こうした時期に大学生活に入った鈴木⁽²⁶⁾の生活の一半は、何よりも郷党の先輩吉野作造や小山東助らとの深いかわりあいのなかで、本郷教会につながっていた。鈴木は上京するとただちに吉野の世話で本郷台町の帝大青年会寄宿舎に入った。ここは中央学生基督教青年会館（いわゆるYMCAの寄宿舎）であったから、当時、日の出の勢いをみせていた救世軍の山室軍平をはじめ、安部磯雄、海老名弾正などが出入りして、青年たちの間には、キリスト教的雰囲気⁽²⁶⁾が充満していた。前述の本間俊平も上京の折には大抵ここを訪ねて青年たちを啓蒙していた。寄宿舎の青年たちの多くは海老名弾正の率いる本郷教会に属していた。

周知のように、明治22年2月11日に発布された帝国憲法は、その第28条に「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及ヒ臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」と記された。キリシタン迫害以来、長い年月に亘って日蔭者扱い⁽²⁶⁾をうけてきたキリスト教徒にも、よ

うやく信教の自由が公認された。しかしながら、「帝国憲法の基本原理を維持するためには、天賦人權論は否定され、身分制的倫理の確立のためには、キリスト教の人間観は克服されねばならなかつた」⁽²⁶⁾から、国家とキリスト教との間には、あらたな波紋がなげかけられていた。天皇を現人神として神聖視し、御真影に対する崇拜問題をめぐって不敬事件にとわれ、内村鑑三が第一高等学校の教壇を追われたのは明治24年1月のことであったが、この頃から明治末年に至るまでの日本キリスト教史は、まさに闘争と試煉の時代であったといわれる。国家主義の台頭の中で、保守反動勢力からうける圧迫に加えて、政治や国家思想に興味をもつ者は、キリスト教から離れていき、欧化主義の時代に一時活発化した教勢も次第に停滞した。これと同時に、ドイツから聖書の高等批判を基礎とする新神学が導入され、日本のキリスト教会内には深刻な動揺が生じた。それまで宣教師から教えられた福音的信仰を素朴に信じていた人々も、次第に新神学に影響をうけ六合雑誌も、進歩派の手に帰した。教会の指導的立場にあった金森通倫は、明治24年6月、「日本現今の基督教並に将来の基督教」と題する小冊子によって正統信仰を攻撃し、伝道界を退いて実業界に入り、また横井時雄は、「今日我邦に行はるる処の基督教は、多くはこれ英米のキリスト教と称すべからざるものあり。これより以後は日本風の基督教を發達するの機会到来したるなれ。此機会に乗じて我日本風の基督教を宣伝せば、天下の人心は必ず靡然として之に服せん。」と「日本将来の基督教」について論じた。

自由主義神学は、こうして従来の福音的信条から解放されて、日本主義的なものと結合する契機を握ったばかりでなく、次の段階には社会主義的なものとも結びついていった。だが、このような動きに対して、どこまでも福音の純粋性を貫こうとする動きもあり、両者の間には、やがてはげしい論争がはじめられた。すなわち、進歩主義、自由主義を代表する本郷教会の牧師海老名弾正と、正統主義の立場を堅持していた富士見町教会の牧師植村正久との間に展開された神学論争がそれである。この大論争は、海老名主筆の「新人」と植村主筆の「福音新報」との紙上において、明治34年9月から翌年7月まで続けられた堂々たる神学論争であったが、海老名は自己を判断の基準として哲学的合理主義の立場に立って論陣を張り、植村はキリスト

注(25) 明治38年6月に書かれたこの作文は、前掲拙稿において紹介している。

(26) 片山康編「近代日本とキリスト教」明治篇、(創文社、昭和31年)、201頁。

信仰が元来歴史的なものであることを主張して、海老名らの哲学的態度を批判した。この論争経過は「植村正久とその時代」に詳細に述べられているが、明治・大正・昭和を通じて最大の神学論争であったといわれる⁽²⁷⁾。

それはともかく、海老名の自由神学は天皇制イデオロギーと結びつき、殉教者として死するよりも愛国者として生きることを欲せしめるほどに、国家は至上なものとして位置づけられた。しかし同時に、神の前に個人の尊厳をも忘れてはならないことを主張する彼の自由神学は、国家を構成する人民の政治的自由・思想的自由をも尊重するというものであったから、鈴木が大学生々活に入った頃の本郷教会には、多くの若きインテリが集り、活気を呈していた。

本郷教会の牧師海老名弾正について、山路愛山は次のように述べている。

「植村君が正統教会の驍将たると相對して自由基督教の総大将と目すべきは海老名弾正君なり。海老名君は年は随分取り居らるけれども、基督教の勇將として名を成したるは比較的近年の事なり。……君は晩成の人にて小崎弘道君などを思想の案内者としたる時節もあり様なり。されど海老名君の思想は年々進歩し、君の学問も年と共に長じ、君が時世に触れ時勢を解する識見も迫々開け来れり。但し君が本郷教会に牧師たる位置も此進歩を助けたるに与って力あるは勿論なり。植村君の番町教会は紳士の教会にして本郷教会は書生の教会なり。本郷教会の如き書生の中心に立ちて海老名君の如く動き易く感じ易く他人より益を受け易き心が時代の潮流に感じ、新思想の鼓吹者となりしは敢て怪しむに足らず。植村君の脳髓は内より生長するものなり。独力の研究を以て独力の發明をなし、他人に無頓着にしてその信ずる所を守るは植村君の長所なり。海老名君は小崎君と遊べば小崎君に感化せられ、横井君と遊べば横井君に感化せられ、善く他人の長所を取って之を醇化す。君は其の心に於て極めて謙遜なり。君の眼中には事理の研究に於ては総ての人は同等なり。君の心は流動せる蠟の如し、余りに強く一定の説を

固執せず、故に君は今日に於ても君の最も善しと感じたる方向に向つて常に其説を変化す。君は神道は耶蘇教と同じ根柢に立つものなりと説き試みんとしたることもあり。武士道と耶蘇教とを混じ、耶蘇教は武士道を聖化したるものなりといふやうに見たることもあり。帝國主義と耶蘇教の並行し得べき点を発見せんとしたることもあり。グリーン、王陽明、物徂徠、見神論、自然主義、社会主義、〈プラグマチズム〉、凡そ君の心の前に現はれたる総ての思想に対し君は何等かの感動なきを得ず。而して君の思想は此感動に依りて何等かの變化を経ざるはなし。此の如き流動体の脳髓を有する君が、自由神学者の泰斗たること敢て怪しむに足らざるなり。……君は天性の宗教家なり。君は思想の極めて自由なると共に常に神に対する崇拜畏敬の念を有す。……」(傍点引用者)⁽²⁸⁾

このような海老名牧師の下には、新思想を求める若きインテリが集り、教壇はまさに当代一流の社会主義者、自由主義者たちの思想的啓蒙の舞台ともなっていた。先輩吉野や小山に導かれて本郷教会に属した鈴木は、こうした雰囲気なかで海老名牧師の説教の筆記を受け持ち、教会の機関紙〈新人〉の編集にもあたりながら、しだいに自らもこれに同化されていった。この間における鈴木⁽²⁹⁾の思想形成については既に松尾尊兎教授により指摘されているところでもあるが、進歩的キリスト教徒として、時代の社会問題に対して深い関心を示しはじめていた。統発するストライキ、とりわけ足尾、別子鉱山の暴動にさいして、鈴木は、はじめて労働者と資本家との間の階級矛盾を指摘した。だが、当初は、労働者に対しては国法を蹂躪する不逞の徒とよび、資本家に対しては労働者を遇するに道を以てせよという「傍観者的温情主義」にとどまっていた。しかしながら、既に実践家としての精神を鼓吹されていた鈴木は、間もなく「かくの如き大問題に対して何らの責任なきか」と自問し、「心に聖賢を慕ひ、口に六経を誦すとも唯載籍の上に窺ひて身を以て踐履せずんば、道に於て何の得るところぞ」とふるい立つのである。こうした鈴木⁽³⁰⁾の意慾をさらに理論的にかりたてたのは、大学での講義であった。自伝に記されている

注(27) 前掲書、200頁-216頁、参照。

(28) 山路愛山「我が見たる耶蘇教会の諸先生」(明治43年12月、雑誌「太陽」所収)。

(29) 松尾尊兎「友愛会史論」(大正デモクラシーの研究、青木書店、1966年所収)。

(30) 前掲書、145頁。

(31) 「社会問題と基督教徒」(新人、1907年9月号所収)

青年時代の鈴木文治

ところによると、彼は大学最終学年で時の社会政策学会の大立物、桑田熊蔵博士の講義にすっかり心を捕えられた。しばしば博士宅を訪ねて教えをうけ、労働問題についての認識をあらたにすると共に桑田の主張する社会改良主義の理論に共鳴し自らをこれに定着させていった。

とはいえ、鈴木の前途には官僚として、或いは財界に入って上から社会政策にたずさわる道も自由に開かれていた。それにもかかわらず、彼は己が歩むべき道として、これらを退けていた。大学時代の鈴木について、片山哲氏は次のように語られる。「私が鈴木文治君に初めて会ったのは、明治41年9月、東京帝大に入学して本郷台町のYMCAの寄宿舎に入った時であった。彼は紋付きに袴をはき、言論といい風格といい、まるで先生かと思うほどであったが、我々若い入学生を相手にして、『将来は大いに弁論をやらなければならない。わが輩は会社に入ったり官庁に行ったりすることをやめ、主として社会運動、労働運動をやらうと思⁽³²⁾っている』と云い出したので皆びっくりしてしまった」。当時の帝大法学部は、いうまでもなく官界への登竜門であったから、学生たちがおどろいたのは、むしろ当然であったと言えよう。だが鈴木⁽³⁴⁾のうちには、既に「生涯弱者の友として生きよう」という心情が培われていた。

明治42年7月、大学生生活を終えた鈴木は、家庭状況を知る先輩小山東助の配慮をうけて、いったん秀英社に入社した。秀英社は我が国最古の印刷工場の一つで、その創立者佐久間貞一は、日本のロバート・オーウェンともいわれるほど、労働組合運動についてはよき理解を示していたこともあり、鈴木にとって学ぶところ少なからずという毎日であった。工場に入るとは職工生活に親しみ、印刷術も研究した。また当時農商務省によって立案されていた工場法案に対する印刷同業組合の答申案作成に際しては、入社後間もない白面青年の身でありながらも、社を代表する一人としてこれに参画した。こういうわけで、鈴木の同社における将来の地位については易々たるものがあつた。しかしなが

ら、既に官界も実業界も、我が道にあらずと意を決していた彼は、より自由な立場から社会・労働問題について学び、とりくむために、翌年3月には同社を退社した。鈴木は退社と同時に東京朝日新聞社への入社試験をうけて合格し、社会部記者として再出発した。

ところで、この入社試験の課題「東京における救済事業現況」は、鈴木にとってはまことに格好のテーマで、10日の期限内に8日間を施設各所の訪問と視察に費やして、20回分の原稿を一気に書きあげたが、これは後に彼をして、「社会運動に駆り立てた伏線⁽³⁵⁾」ともなったのである。社会部記者としてスタートした鈴木は、入社3日目に「ハレー彗星」の記事を書くことを命ぜられ、俄か拵えの天文学者になって狼狽したりもしたが、持前の天分をよく生かして、社会事業、宗教問題、教育関係の記事を担当、時のトピック・ニュース、南北朝正閏問題、大逆事件等の記事の取材にもあたり、編集主任にまで進んだ。しかし、編集上の失策のために在職わずかに1年半にして退社のやむなきに至った。

鈴木の記者生活時代に、彼の心を最もとらえていたものは、貧民窟のドン底探検であった。彼は自ら印ばんでん腹がけ姿に変装して東京中のスラム街を廻り、木賃宿にも幾度か泊り、スラム街にある救世軍や浄土宗の救済機関を訪ねて実態調査を行い、「東京浮浪人生活⁽³⁶⁾」を発表した。これと同時に、貧民救済事業の興隆を計るため「浮浪人研究会⁽³⁷⁾」を組織し、自らその世話役をつとめた。その会員中には、内務省嘱託の法学博士小河滋次郎、救世軍の山室軍平、前東京市長で慶應大学教授の堀切善次郎、鈴木とは大学同期で後に警視總監となった丸山鶴吉などが名をつらねていた。これらの人々は、後に鈴木が友愛会を創立するにおよんで有力な後援者となった人々である。それはともかく、鈴木がこの浮浪人研究調査の過程で発見したものは何であったろうか。それは没落した中間層が意外に多いという事実であった。本来「国家の経済力の上からも」「国民思想の上からも」きわめて重要な役割を果たすべきはずのこれら中堅層の人々の没落に対して、何ら

注(32) 当時の社会政策学会には、右派の論客として浜田寿一があり、左派の理論家としては高野岩三郎があつた。桑田は、その中間にあって改良主義を主張した。

(33) 筆者への片山哲氏談、1974年11月6日。

(34) 自伝、29頁。

(35) 自伝、31頁。

(36) 東京朝日新聞、明治43年12月9日から44年2月14日まで亘つて連載されたこの記事は好評をえた。

(37) 明治44年2月10日結成されたこの会は1年のうちに会員40人となった。(六合雑誌、1912年2月号参照)。

の救済策も講じられていないという実態を、鈴木は深刻にうけとめていた。

鈴木が記者をしていた頃、朝日新聞社には、鈴木と同じ東北生れの文学青年石川啄木が校正係として勤務していた。宮城県と岩手県互いに隣接する地に、しかも僅か1ヶ月余の差で呱呱の声をあげた2人は、社内で時折顔を合せてはよく議論をしたようである。啄木⁽³⁸⁾の明治44年1月3日の日記には、次のように記されている。「平出君と与謝野氏のところへ年始に廻って、それから社に行った。平出君の処で、無政府主義者の特別裁判に関する内容を聞いた。若し自分が裁判長だったら、菅野スガ、宮下太古、新村忠雄、古河力作の4人を死刑に、大石、幸徳の2人を無期に、内山愚堂を不敬罪で5年に、そしてあとは無罪にすると平出君が云った、またこの事件に関する自分の感想録を書いておくと云った。幸徳が獄中から弁護士に送った陳情書なるものを借りて来た。与謝野氏の家庭の空気は矢張り予を悦しめなかった。社では鈴木文治君と無政府主義に関する議論をした。留守中に金田一君が年始に来て、甚だキマリ悪そうにして帰ったそうである。夜、丸谷、並木二君が来て、12時過ぎまでビールを抜いて語った」。平出君とは大逆事件で法廷に立った平出修弁護士のことで、啄木とは「明星時代」からの交際があった人物である。

周知のように、貧困と病苦に闘いながら文学への情熱をもやしつづけていた啄木は、大逆事件の発覚を契機に、その思想を大きく左へカーブさせていたから、彼にとって鈴木はまさに好個の論敵となったとも言えよう。他方、鈴木は貧民問題、労働問題に深い関心をいだきながらも、無政府的社会主義の唱導を不健全なるものとして強く否定していた。没落した中間層を放棄しておくことは、とりもなおさずかかる不健全なる思想へと、これらの人々をかりたてる危険性を醸成している如きものであると考えた。彼は、啄木のように矛盾にみちたロマンチストではなかった。鈴木文治の足は、現実という大地にしっかりと据えられていた。だが、それは同時に、きわめてナショナルな地盤でも

あった。

それにしても、青年鈴木をかくあらしめたのは、そもそも何ものであったろうか。ここに今きわめて大雑把に彼の高等学校・大学時代を一瞥してきたのであるが、青年時代の鈴木⁽³⁹⁾の思想形成には、興味深い問題が多々あるように思われる。彼が高等学校時代を過ぎた長州・山口、それは戊辰戦争では彼の郷里仙台藩とは敵対し、今や幾多の人材を権力の座に据えた勝者の地であった。そうした地であって、自らは没落した苦学生として1人呻吟するなかで、東北人固有の薩長藩閥への対抗意識が芽生え、しだいに反権力的自由の精神が彼のうちに内包されていったのではなからうか。そしてそれは、やがて彼をして官界への登竜を固くこばませ、野人としての自由な立場にあって「生涯を弱き者の友として生きよう」と決意せしめる要因ともなっていたように思われる。

既に述べたように、こうした青年鈴木の心を最も強く導いていたのは本間俊平その人であった。社会から没落した不良青少年を己が採掘場に集めて、労働の神聖なるを自覚・更生させ、もって再び国力繁栄の徒たらしめんとした本間の救済事業は、学窓を出て実社会へスタートした鈴木に、自らスラム街を探検せしめた原動力となっていたと言っても過言であろうか。友愛会の創立に当って、鈴木が何よりも先ず、労働者に品性の向上を促したのは、単に官憲の弾圧をさけるためのみの策ではなく、本間俊平の人格養成論に心底から共鳴していたからではなからうか。

さらに、キリスト教徒としての鈴木⁽⁴⁰⁾の信仰はどのようであったか。彼の信仰の眼は、生涯を通じて、しっかりと十字架上のキリストに向って注がれていた。しかしながら、少年時代にハリスト教(ギリシャ・カトリック)の洗礼をうけた鈴木は、高等学校時代にはメソジスト教会に出入りし、大学時代には海老名弾正の組合派教会に属し、さらに朝日新聞社退社後は、ユニテリアン協会の事業にたずさわるといふ過程のなかで、必ずしも神学的には、一貫した理論をもちつづけていたものではなかったと思われる。それは、正統派に対

注(38) 鈴木は明治18年9月4日に生れ、啄木は、同年10月27日に生れている。啄木は明治42年2月、朝日新聞社に校正係として入社した。

(39) 若くして世を去った啄木は、青春のシンボルのように若いイメージを今なお保ちつづけている。しかし彼ほど矛盾にみちた、いくつもの顔をもつ文学者はまれである。軽薄と真摯、剛氣と弱行、善意と身勝手、貴族性と民衆性、選民意識と卑小感、西欧的近代意識と封建的感情、彼の内外は間断ない矛盾の渦巻が湧きわたっていた。(大谷利彦「啄木の西洋と日本」研究社、昭和49年、参照)。

青年時代の鈴木文治

立する海老名弾正の自由神学のように、きわめて現実的な寛容さをもっていたものといえよう。そしてそれは、また烈火の如き信仰の実践家であると同時に、⁽⁴⁰⁾ 国運の前途を慮るナショナリスト本間俊平にも相通じるものであった。

かくして鈴木文治は、後進資本主義の国、日本が日清・日露の両戦役を経て急速に発展する途上で露呈された帝国主義の種々の矛盾のなかから出現した、いわゆる日本的キリスト教徒たる海老名弾正や本間俊平との深いかわりあいのなかで、若き日の思想的活力を養われ、それは、やがて友愛会の創立に向って彼の歩みを進ませる力ともなったのである。

〔付記〕 資料の収集に際してお世話下さった山口大学の古賀秀男、馬渡淳一郎両教授、また助言と発表の機会を与えて下さった飯田鼎教授と小松隆二教授、諸先生に心から感謝申し上げる次第でございます。

なお、本稿は鈴木文治の生涯研究に関するものとして、先に日本労働協会雑誌に発表された二つの拙稿「鈴木文治に関する一研究——生いたちと背景」(200号)、「鈴木文治の生涯——宮城の労働運動を中心として」(215号)、につづく研究ノートであることを付言させていただきます。

(東北大学大学院経済学研究科研究生)

注(40) 本間と並び宗教的实践家として知られる賀川豊彦は、反戦論によって留置されたりした経験をもつが、本間はむしろ戦争に協力的姿勢を示した。彼の主宰する雑誌には皇軍慰問号を発行し、また自分の息子の召集嘆願書を軍司令部に提出するほどの愛国心の持ち主であった。